1991

メラ・ピーク

登山隊報告書

横浜市立大学探検部

はじめに

吉見　敦司

山を楽しむ者なら誰もが一度は……と憧れるヒマラヤ。前年の天山山脈トムール峰遠征が失敗に終わった後、ヒマラヤの頂きに立ってみたいという欲求が生じたのはごく自然なことであった。当初パキスタンの未登峰をと準備を進めていたが隊員の力量などを考慮し、最も手軽なネパールのトレッキング・パーミッションで登れる山へ変更した。手軽といってもメラ・ピークは6600mの高度があり、又無数のクレバスが口を開けており十分な準備が必要である。幸い1989年に我が部は同じネパールのアイランド・ピークに遠征しており資料・情報は豊富に得ることができた。ただ国内訓練山行がことごとく失敗しトレーニング不足であった。それにもかかわらず5名全員登頂できたのは、積雪が少なかったこと、天候に恵まれたことなどと共にアイランド・ピークに征かれた先輩方、コスモ・トレックの皆さん、ガイドのダワさん、ポーターの人達などの協力によるところが大きい。この遠征にご協力頂いた方々に隊員一同厚く御礼申し上げます。

この遠征での経験は私達の人生の中でキラリと輝く瞬間であった。今後もより一層輝く瞬間を求めていきたいと思う。

出発までの経過

吉見　敦司

1990年夏、天山山脈トムール峰遠征に参加した私は、隊員３人の遭難死の無念さからヒマラヤの高峰に登りたいという思いを強く抱いていた。同期の三浦、同じくトムール峰遠征に参加した田村も同じ思いだったらしく来春にどこかに行こうということになり、１年の有力株の立木・小森を誘いパキスタンの未踏峰に照準を定め資料集め等の準備を進めていた。

しかし準備期間の不足、隊員の力などを考えもっと手軽に登れる山、ネパールのトレッキング・パーミッションのピークに変更し、その中で技術的に容易で最高峰でもあるメラ・ピークに目標の山を決定した。我が部は1989年に同じネパールのアイランド・ピークに遠征していたので、その時収集したトレッキング・ピークに関する資料が豊富にあり非常に助かった。現地でのパーミッションの取得やガイドの雇用などはトレッキング・エージェトにお願いすることとし、89年にお世話になったコスモ・トレックに書簡を送っておいた。

メラ・ピークは技術的な問題点はなくむしろ体力勝負の山であるので、訓練山行として富士山を選び都合３回いったが、厳冬の富士をなめてかかっていたところがありいずれも頂上まではいけずじまいであった。

本当に登れるのか、いや絶対登ってやるという思いを胸に成田を出発した。

隊員名簿

吉見敦司（ＣＬ・渉外・会計）

[redacted]

文理学部文科社会専攻2年

三浦　研（装備）

[redacted]

文理学部文科地理専攻2年

小森啓志（食糧）

[redacted]

文理学部文科1年

立木大造（医療・記録）

[redacted]

文理学部文科1年

田村康一（写真記録）

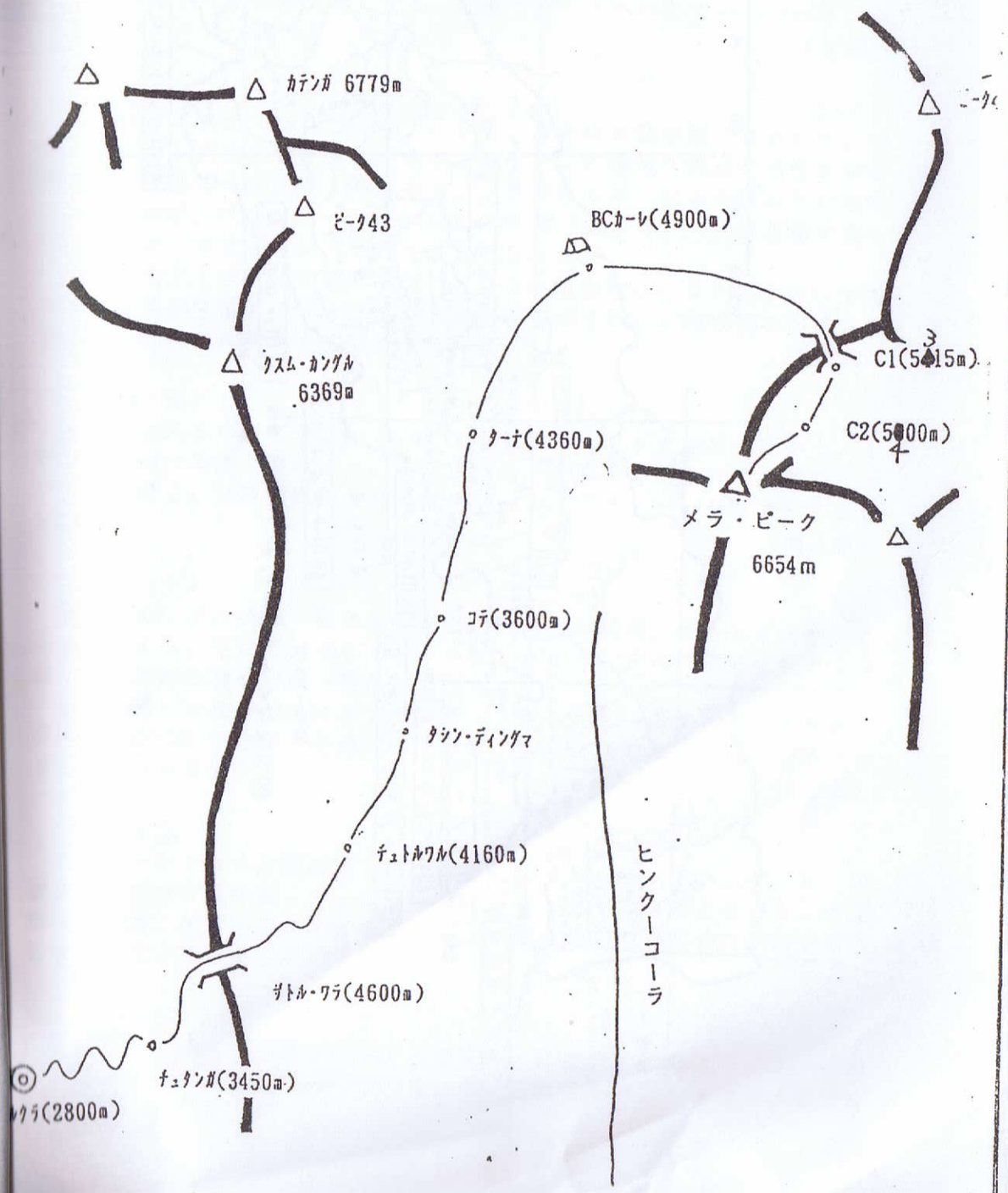
[redacted]

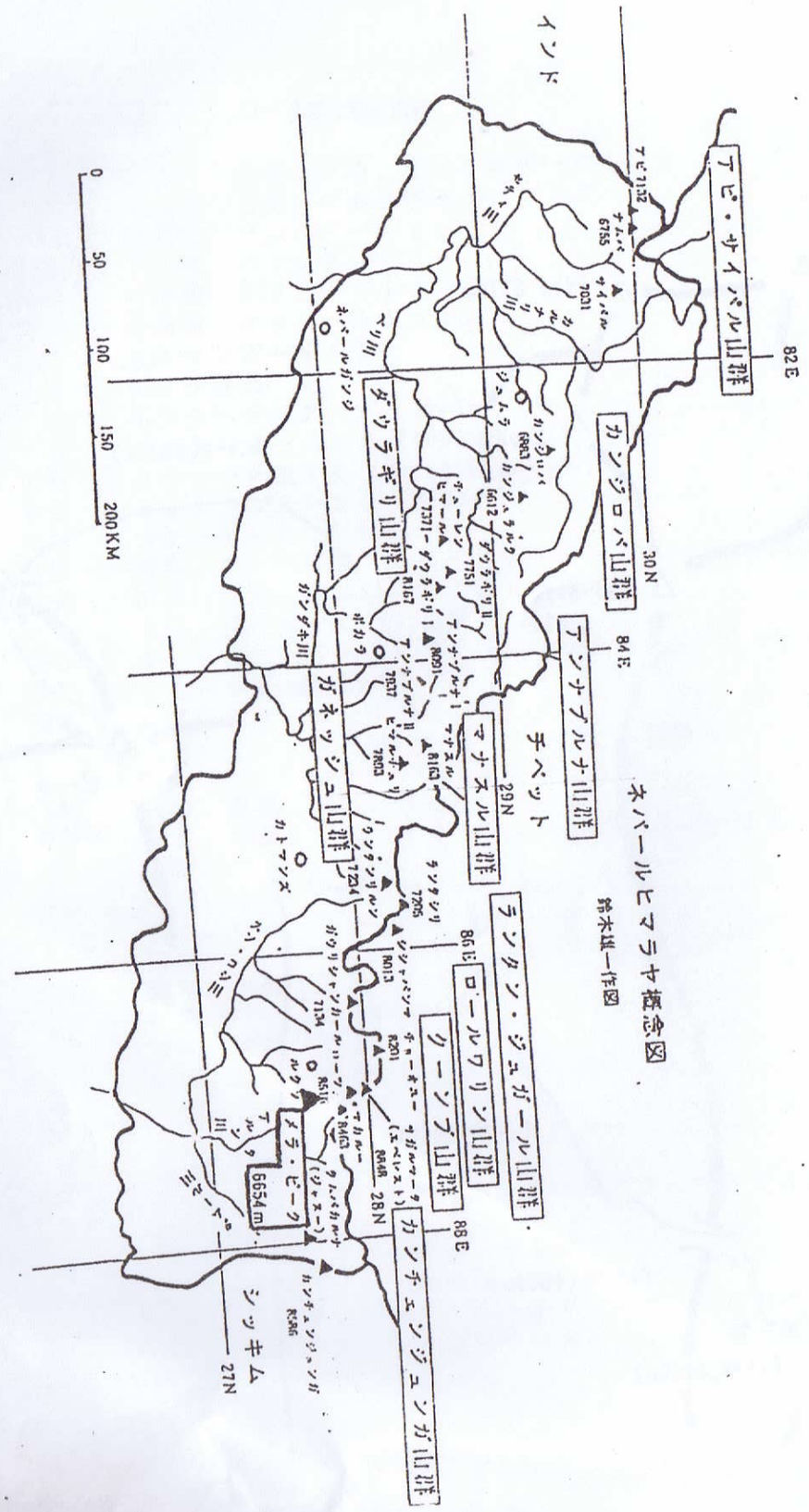
探検部ＯＢ（1990年卒）

日程表

2月20日	先発隊（田村、三浦、立木）成田→バンコク
22日	後発隊（吉見、小森）成田→バンコク
23日	先発隊　バンコク→デリー
27日	後発隊　バンコク→デリー
28日	先発隊　デリー→カトマンズ
3月1日	後発隊　デリー→カトマンズ
4日	カトマンズ→ルクラ
5日	ルクラ停滞
6日	ルクラ→チュタンガ（3300m）
7日	チュタンガ→カルカ（4000m）
8日	カルカ→チェトルワル（4165m）
9日	チェトルワル→コテ（3600m）
10日	コテ→ターナ（4350m）
11日	吉見、ターナ停滞　その他、ターナ→カーレBC（4800m）
12日	田村、三浦、小森は5200mまで荷揚げ
	吉見、ターナ→カーレBC
13日	カーレBC→メラ・ラC1（5300m）
14日	C1→C2（5350m）
15日	C2→メラ・ピーク（6654m）
	→三浦、吉見、クレバス（5900m）
	→田村、立木、小森、C2
16日	三浦、吉見　5900m地点
	立木、小森　C2→C1→C2→5900m地点→C2
	田村　C2→BC→C2
17日	三浦、吉見　5900m地点→C2
	立木、小森　C2→5900m地点→C2→BC
	田村　C2→5900m地点→C2
18日	立木、小森　BC→C2→BC→ターナ
	吉見　C2→ターナ
	田村、三浦　C2
19日	吉見、立木、小森　ターナ→峠手前の大岩
	田村、三浦　C2
20日	吉見、立木、小森　大岩→チュタンガ
	田村、三浦　C2
21日	吉見、立木、小森　チュタンガ→ルクラ→カトマンズ
	田村、三浦　C2
23日	田村、三浦　C2→ディ・カルカ
24日	田村、三浦　ディ・カルカ→ターナ
25日	吉見　カトマンズ→ターナ→カトマンズ　（ヘリ）
	田村、三浦　ターナ→カトマンズ　（ヘリ）
27日	解散

概念図





メラ・ピーク登山隊行動記録

2/20（水）

先発隊（田村・三浦・立木）23:30 バンコク到着。格安チケットの利用で当然のことながら深夜着となる。空港ビバークはやめて300バーツのタクシーでカオサンロードへ。（立木）

2/21（木）

午前中、"Thai Guest House" に移る。なかなか値の割にきれいだ。午後、カトマンズ行のチケットを求め、カオサンの旅行代理店を何軒か回るがどこも満席である。しょうがなく、'タカちゃん' なるうさん臭い日本人のいる所で、バンコク↔デリー（9300バーツ）をとる。ネパールを目指す我々ではあるが、なぜかインドへ行くこととなった。

夜、「帝王」田村氏に連れられパッポンへ繰り出し、なかなかハードなショーを展開するストリップを見るも見事にボラれ、一同憤慨の面持ちで帰る。「的にはなりたくない」（三浦談）（立木）

2/22（金）

インドに入るにはビザがいる。そこで朝からインド大使館へ向かう。1時間くらいで申請が終わった。受取は26日。その後そごうや泰文堂をブラブラして帰る。18時頃田村・立木はチケット（デリー↔バンコク）を受取に行く。（三浦）

2/23（土）

昼からルンピニ公園・動物園をまわり16時にお昼寝。どうもすっかりだらけてしまう。更にこれからインドに行くという。やはり志気を保つには素早く目的地に着くのが一番だ。

夜、吉見・小森を迎えにホアランポーン駅へ行き一杯やってから汽車で空港へ。24:30 頃吉見・小森が出てくる。吉見は30℃のドンムアン空港にブラブーツで登場。（立木）

2/24（日）

デリー→カトマンズ間は思っていたよりむちゃくちゃ遠い。そこで「大蔵省」吉見の財力に頼って、デリー→カトマンズも飛行機となった。片道約20,000円。夕方、ムエタイを見にいく。我々以外の観客の大多数が熱心に賭けを行っていた。（立木）

2/25（月）

朝早くから吉見・小森はインド大使館へ。昼食後、代理店でデリー→カトマンズのチケット代(3,657バーツ)を払う。これでやっとカトマンズまでの

メドが立った。（当初予定より３日遅れ。）時間と金を浪費することになり隊員の一部から「タカちゃんにやられた」との声もあがっている。

（立木）

2/26（火）

９時にインド大使館へ。VISAは１回入国ONLYで２回に変更してもらおうと交渉したが、「申請用紙に印がついていない」との理由で拒否された。インド人は論理的である。

17時に田村・三浦・立木の３人は空港へ向かう（３人は今日のエア・フランス、吉見・小森は明日のアエロ・フロート）。市街は大渋滞でタクシーの運ちゃんが割込みや逆走を繰り返し18時半に空港につく。しかし出発は遅れて21時となった。

23:30 頃、デリー到着。（インド時間、バンコクと時差1.5 時間。）

（田村）

2/27（水）

メインバザールで飯を食ってから、三浦・立木は帰りのフライト（デリー→バンコク）の日程を変更するためにコンノート・プレイスへ向かう。公園をブラブラしていると耳そうじ人とマッサージ男が寄ってきたので３人ともやってもらった。インド人は何でも職業にしてしまうのがおもしろい。

吉見・小森もデリーに来ているはずだがどこにいるか分からない。

（三浦）

2/28（木）

今日は５人でカトマンズ入りの予定だ。午後はやばやと空港へ行く。ところでこのチケットにはデリー発19時と記されているが、空港の表示は18時で、どうもカトマンズ着が19時らしい。そうなると当然吉見・小森の空港入の時刻が心配され、トランプしながら待ったがぎりぎりになっても２人は現れなかった。結局３人で乗り込みカトマンズへ。空港で客引きしていた日本語の上手な親父に連れられ、タメルからちょっと離れたホテルにチェック・イン。カトマンズは随分涼しい。

２人はどこだ？　湾岸戦争が終わったそうだ。　（立木）

3/1（金）

10:30 頃コスモトレックへ行く。２人が行方不明なためトレッキング・パーミッション、クライミング・パーミッションの手続きはできず、とりあえずルクラフライトの予約だけ入れ、残りは３日に済ませることにする。２人が今日来れば計画より４日遅れで４日にルクラ入りできそうだ。

夕食後、吉見・小森が今日の飛行機で来ることに賭けて空港に自転車で行ってみる。ターミナル外から見ていると、顔にペイントを施した汚い男が２人歩いて来た。どうも吉見と小森のようだ。デリーでホリーをまともにくらった顔である。何はともあれ、やっとみんなカトマンズに集合した。

（立木）

3/2（土）

午前中、各自おもいおもいに市内をぶらぶらする。カトマンズは街が小さいせいか、自転車で市内をまわると全体像がつかめてくる気がする。田村は風邪をひいたようで、鼻をすすりながら「もうだめだ」と訴えている。明日は一日ですべての準備をしなければならないので忙しそうだ。

（立木）

3/3（日）

10:30 に具合いの更に悪化した田村を除いて、４人でコスモトレックに行き、ガイドのダワさんを紹介される。気は弱そうに見えるが、しんは通っていそうだ。その後、ダワさんの知っているレンタルショップでシュラフ，ダウンシャケットなどを借りる。そこでは700ﾄﾞﾙものデポジットを要求され不満ながら吉見が支払った。

夜、田村の熱は38度5 分まで上がり、恥をしのんで座薬を使用したがかなり苦しそうだ。　（立木）

3/4（月）　10時曇14℃　13時曇９℃　20時曇８℃

朝から曇っていたが、無事ルクラ行の第２便で行くことができた。ルクラは本当に小さな集落といった感じだ。雪は少なめだそうだが、昨日降ったらしくポーターの賃金は１日160ﾙﾋﾟｰと高めになっている。トータルのポーター代を計算したところ、我々の持っているルピーでは足りないようだ。ルクラには両替のできる銀行もなく困ったものである。

４時頃外は雨になる。ダワさんはルクラに着くなりザイル・ＥＰＩボンベなどを得るため、ナムチェ・バザールへ出かけていった。明日10時頃帰ると言う。素晴らしい体力である。　（立木）

3/5（火）　10時みぞれ７℃　16時小雪３℃　20時晴５℃

９時頃ダワさんが帰ってきたが、その前後より雨足が強まる。雨はみぞれから雪にかわり、昼まで様子を見ることになったが、結局やまず停滞となった。暇つぶしにトランプをしたが、三浦が猛烈に臭い屁をこきまくり、みんなの非難をあびていた。

明日は７時発、一気に4600ｍの峠越えの予定である。天気と体調のよいことを願う。　（立木）

3/6（水）　７時快晴２℃　19時曇５℃

天気の心配も杞憂に終わり、みごと快晴。ついにメラ・ピークにむけてキャラバンの開始である。８時半頃から出発するが、昨日の雪と過重の荷物のせいかポーターの足どり重く、峠越えどころか3300ｍのチュタンガどまりとなってしまった。行動時間も３時間程であり、もっと先へいきたい

気持ちがつよかったが予想以上の積雪のため仕方ない。ダワさんの話では明日も峠越えは無理のようである。

体調の悪い立木を除く４人は高度順化のために200 m程上ってみた。流石にまだ高山病になるものはいないが、立木はヒドイ下痢で、食事も充分とれず１日中憂鬱な顔をしている。

それにしても、16、18 といった自分より幼いポーター達が30キロ40キロの荷物を運ぶのをみていると、尊敬．驚嘆．憐憫の入り交じった複雑な気持ちになるものである。

（小森）

3/7 （木）　７時快晴０℃　　12時快晴11℃　　18時ガス０℃

6:30、ニマさんのモーニングで目が覚める。今日も雲ひとつない快晴。7:30朝食その後パッキングをする。前日ポーターの荷物が重すぎて、我々よりだいぶ遅れたので、なるべく軽くなるようにサブ・ザックに食糧・金などを詰め込む。8:50出発する。相変わらずポーターたちは遅い。9:20峠までのルートがよく見えるところまでくる。話に聞いていたよりは雪は少なそうだ。昨日，立木は腹の調子がよくなかったが，今日もあまり変わらないようだ。その他の隊員は元気。

12:30 カルカ(4000m) 着、雪が多くて雪崩が危ないので、今日はここ泊まりとなる。14:00 昼食。その後全員で4200m まで高度をかせぎにいく。立木・小森・田村は頭痛を訴える。ダワさんとポーター２人は明日のトレースを作るため4500m 付近まで登った。上のほうは腰くらいまで雪があったそうだ。

18:30 翌朝、雪崩をさけるため早く出発するので、いつもよりはやくシュラフにもぐった。

（吉見）

3/8 （金）　６時半快晴－５℃　　13時晴14℃　　18時晴３℃

今日は峠越えだ。4:45起床。ポーターを歩きやすくするためと雪崩をさけるために、早朝の雪の硬い時間に出発だ。6:30出発。ルクラの山には、すでに陽が当たっている。昨日のトレースがあるので歩きやすい。小森が胸の痛みを訴えていたが、その他のメンバーは順調。吉見・立木は8:30チェトル・ラ(4400m) についた。ルクラ方面を見ると大きな山が姿を見せていた。ダワさんにあれがチョー・オユーだと教えられた。初めて見た8000m峰だ。感動。全員がチェトル・ラに着いたのは9:00すぎ。ここからザトル・ワラまでは、少しトラバースした後、上りぎみにトラバースとのこと。

峠はすぐ近くに見えるのにぜんぜん近くならない。ヒマラヤの大きさを感じる。雪はそれほど多くないが、時々膝までズボッともぐるので疲れる。結局ザトル・ワラに着いたのは12:00 だった。峠の向こう側の雪はまばらである。13:30 チェトル　ワラ着。まだ時間も早いし、もっと下で泊まるのかと思っていたらポーターたちが疲れていて、この先のテン場まで３時間かかるので、今日はここ泊まりだと言われた。小森・三浦の調子が良くなかったので、もっと下まで行きたかったが、ポーター達は今日よく働いてくれたので承諾した。

17:00 夕食。小森は吐き気がするらしく夕食をとらなかった。三浦も少ししか食べなかった。心配だが、明日下れば回復するだろう。

19:00 就寝。

（吉見）

3/9 （土）　６時晴２℃　　12時ガス10℃　　18時ガス４℃

6:30起床、7:50出発。小森は昨日より調子は良さそうだが、かなり苦しそうである。また、吉見の調子が悪い。チェトル・ワラから一気に下るのかと思いきや、トラバースぎみに峠をいくつも越える。最後の峠を10:30に越え、そこからガスの中、雪深い道を下って行く。今日はポーターも早く我々と同じか、我々より早いくらいで歩いている。食糧が少なくなるとそれに反比例する形でスピードがあがるようだ。12:20 タシン・ディングマ着(3300m) 。まわりの雪も少なく、コケをまとった木がうっそうと繁っている。ヒンクー谷は青木か屋久島を思い起こさせる。昼食後13:50 コテ発。ガスは相変わらず結構ひどい。コテに近づくにしたがって、また雪も増える。

15:10 コテ着。今日は田村の24才の誕生日だったため、それにこじつけて我々の日本食を食べようという意見が起こり、ダワさんに言って我々で雑煮，マッシュポテトをつくる。キャラバン４日目にして、１日２回は登場するチャパティーorパンケーキに皆嫌気がさしていたようで、久々の食べ慣れた食事は非常に満足であったようだ。

（立木）

3/10（日）　６時快晴２℃　　11時晴13℃　　19時晴－２℃

6:00起床。7:30出発。沢沿いの道を緩やかに登って行く。雪はまばらである。前方にシャルバテヒマールとクスムカングルが、鋭利な稜線を見せている。シャルバテヒマールは、なんとなくハンテングリに似ている。9:30、トンムジャ着。ここで早めの昼食となる。三浦の提供した梅干しで、大いに食がすすむ。

11:30 広いヒンクーコーラの河原歩きが続く。吉見と田村は調子が悪く、ポーターや他の３人に大きく遅れをとる。今日はポーターたちのペースが異常に速い。行手の右側に蒼氷をつけた無名峰がそそりたち、左側にはクスムカングルが雲間に見え隠しているが、絶え間なく襲ってくる吐き気とたたかう私（田村）には、はっきりと認識できない。ヒンクーコーラは右手にカーブして，その先にメラ・ピークが見えていたはずなのだが、私にはぼんやりと山容がかすんで見えていただけであった。

14:45，ターナ(4350m) 着。ターナには無人の岩小屋が何軒かあり、ポーターたちは小屋の中、我々は周りにテントをはって宿泊する。ターナの景観は、２年前のアイランド・ピークの際のディンボチェ(4200m) に似ている。17:45 晩飯。今日のチャーハンはなかなかおいしかった。しかし、キャ

ラバンを通して炭水化物オンリー（ララヌードル．パンケーキ．ゴハン．チャパティー）の食事にかわりなく、この事態はあきらかに異常である。夕食後の会話も、きまって食べ物のことが話題にのぼり、隊員それぞれの出身地による食文化の違いが垣間見え興味深い。

19:00 就寝。落雷の音。　（田村）

3/11（月）　6:30快晴－４℃　11:30 快晴12℃　18:30 ガス－２℃

朝起きると昨日に続いて吉見が不調で、テントから出てこず、今日は動けないという。そこでニマさんと吉見をターナに残し、ダワさんも夕方ＢＣからターナまで帰ることになった。

8:20ターナ発。ターナからは急な登りが多くみんなバテた。11:00 ディカルカ着。ポーター達はここの岩小屋で宿泊するようだ。岩小屋に余分な物を残してＢＣに向かい、カーレＢＣ(4,800m)14時到着。雪は10㎝くらい残っている。

ＢＣ到着後、田村・小森がテントを張り、調子の良い三浦・立木が上部のルート偵察に行ったが、思ったより雪が多く膝までもぐる所も度々あり、上に進むのに手間どった。しかし明日のルートは大体わかった。そして夕食は待ちに待った我々の食糧のカレーで、カーレでカレーを食べて非常にうまかった。寝るときＢＣで調子の悪い者はなし。　（三浦）

3/12（火）　6:30快晴－11℃　12時晴13℃　18時晴－６℃

昨日ＢＣにはいった４人のうち腹の調子の悪い立木を除いた田村・三浦・小森の３人は、Ｃ１荷物デポのため９時にＢＣを出発する。昨日三浦・立木が偵察したルートを通り、あまり頼りにならない田部井隊報告書・地図を見ながらのこのこ進む。雪はそれほど深くはないが、大きな岩のあいだや谷を通る時にはやはりずぼりと膝上まで雪がくる。

３時間半程歩いてもまだまだＣ１予定地は遠くガスも出てきた。田村は途中、豪華な朝食を消火せぬまま吐き調子悪し。そうした理由で、Ｃ１はおろか氷河地帯に入る手前に荷物をデポしＢＣに帰ることにする。風も強まり雪も舞ってきたが帰りは１時間であった。

ＢＣに戻ると吉見が到着しており、無事ＢＣに５人そろうことができた。しかし隊員の調子はだいぶ崩れてきたようである。田村は微熱もあるようで不調、吉見も少し苦しそう、立木は慢性腹痛、三浦・小森は少し頭痛があるようだがまだ元気。明日のＣ１入りはなかなか大変そうである。

（小森）

3/13（水）　６時快晴－８℃　12時晴７℃　18時雪０℃

4:30起床、8:00出発。全員でＣ１へ向かう。前日の田村・三浦・小森のデポ地に10:30 到着。この辺から氷河があらわれ、氷河の上に乗り、ひざ上までのラッセルとなる。しばらくラッセル隊長として三浦の活躍が見られたもののやがて力つき、皆疲れきったところ（メラ・ラより少し手前）でガスって何も見えなくなる。小森のうんこの最中に話合い、三浦の反対があったもののガスが晴れなければ、メラ・ラの少し手前の地点にＣ１（5300m）をおくことにする。14:30 頃より雪となり、相変わらずガスっていたので15:00 Ｃ１建設決定。テン場は広い雪原。

夕食の時、三浦から明日アタックしようとの意見が出たが、田村の、ツェルトを持ってビバーク体制で臨まなければ不可能だという主張に三浦も諦めた様子。

明日は予定通りＣ２入りとなる。　（立木）

3/14（木）　６時晴－10℃　12時雪－２℃　18時晴－12℃

4:30、吉見の声によって寒い中を起こされる。鮭茶漬けの中々うまい朝食をすまし外に出ると、今までにはなく上層にすじ状の雲が見られ天気が心配である。しかし全員快調で8:00出発。メラ・ラまでは200 ～300mの距離にみえるが１時間程かかる。

9:00メラ・ラ到着。今朝の心配どうり、吹きふきつける地吹雪で前進もままならない状態になる。しかたなくメラ・ラを少しすぎた辺りの凹地のなかに４天を張り、一時休憩となった。たまにクレバスもあり気が抜けない状態である。13:00 頃までおり、なんとか風がおさまったころ出発するが，歩き始めた時には、すでに、またもやガスの中で30分程歩いて諦め14:00 に幕営することに決定。（Ｃ２、5,350m）

テントを張り始めた頃には、またガスが晴れて悔しい思いをする。風はやはり強い。明日ここから約1100m の高度差をアタックすることになると思うが，これも天候しだいである。今日のような天気ではまず不可能だろう。晴れることを祈る。　（三浦）

3/15（金）　６時　晴　－15℃

３時半起床。風は強いが晴れているのでアタック決行となる。みんな目出帽をかぶるなどして6:40出発。アンザイレンをして氷河上のゆるやかな登りを進む。硬い雪は歩きやすいが、プラブーツの埋まるくらいのところも多々あり、トップをゆく吉見はクレバスを確かめながらゆっくり進んでいる。

12時頃、Ｃ２から正面に見えていた雪壁の右を過ぎクレバスの多い地帯にはいる。左から巻くことにし、尾根をあがり山頂直下の斜面にでる。田村が苦しそうだ。ここから雪の量が増え膝下のラッセルとなり交代で進む。

15:15 、コルのようなところにでる。そこからは一気に丘を登る感じで進み、15:45、５人全員登頂。風強しだが天気は良く、チョモランマ・マカルーはもとより遠くにカンチェンジュンガも見える。記念撮影や小森のザックが下に落ちるなどあってから、16:00 下山開始。

下山では雪壁の左にでるルートがとられたが、途中急斜面に出くわし確保をとってくだる。

17:30、雪壁直下。ここからはゆるやかなくだりだ。三浦－吉見（アンザイレン）、小森－立木－田村（同）の順でくだる。30分程歩いたところで(5,900m)突如として三浦の姿が見えなくなり、吉見のかけ声から三浦がクレバスに落ちたことがわかる。三浦は田村の呼びかけに反応し意識はあるようだ。４人でザイルをあげようとするものの、疲れもあってかあまりザイルは動かない。三浦－吉見がアンザイレンしていた40mザイルは、地上に５～６m残しあとはクレバスに落ちている。三浦は30mくらい落ちたようだ。三浦の状態などわからないので、そこで吉見が懸垂下降で三浦のところへ下り始める。しかし途中ザイルがはずれて結局三浦のところまで落ちた形となってしまう。

19:30、今日中に２人を引きあげることは諦め、上の３人が一旦Ｃ２にくだり下の２人のシュラフなどを持ってくることになり、20:00、３人で出発。

しかし暗闇の中ヘッテンをつけての行動となり、テン場（Ｃ２）の位置がさっぱりわからなかった上、小森と田村がクレバスに足を突っ込むなどあり、再度今日登るのは危険だと判断し、なんとか22:00 にＣ２に着くと簡単な夕食を済ませて24:00 に寝た。

夕食中にミーティングを行い、明日１人がＢＣにくだりダワさんやポーターと上がってもらうよう交渉し、また２人はＣ１のデポ品を回収後現場へ向かうことが決定した。（立木）

3/16（土）　6時快晴　12時晴　18時晴　気温測らず

朝の予定では田村・立木が事故現場へむかい、小森がＢＣに連絡のため下山することになっていたが、デポ品を回収する段階（8:10発、8:30C1着）で田村の調子が悪く、そのまま田村と小森がチェンジして田村がＢＣへむかう。

田村は10:00 にＢＣ上のモレーンでダワさんに会い、事故の報告と救援依頼をおこなう。当初はポーター２人がEPIボンベ・ザイル・食糧・ボリタン等をもってＣ２へあがり、ダワさんは航空券その他の変更のためルクラに戻るという手はずになっていたが、２人（三浦・吉見）を引っ張りあげる場合ダワさんが必要なので、無理に上にあがってもらうよう頼む。ダワさんは一度ディカルカに下り、必要な装備等をもって12:00 ＢＣにもどってきた。

12:15 ダワさんと屈強なポーター２名（“装備代”を支給することで上部へいってくれることになった。）と私の４人で出発。私は空身にもかかわらず、ダワさんらに遅れること約１時間16:15 にＣ２に到着した。（田村）

Ｃ１で田村と別れアイスバイル・アイスハーケンなど持ってＣ２へ戻る。9:20Ｃ２発。立木・小森の２人で現場へ向かう。昨日の疲れかすぐ息があがり苦しい。時折クレバスに片足をとられながらも13:20 現場到着。２人の様態が心配されたが、わりと元気そうな声が帰ってくる。シュラフ・食糧などを降ろした後、アイスバイルなど登攀具を降ろすかどうか聞いたが、自力では無理と吉見が言うので降ろすのをとりやめ、明日の引き上げに期待をかけ14:30 立木・小森下山開始。

徐々にＣ２が近くなるにつれテントのまわりに何人か人が見え、ポーター達があがってきてくれたことがわかる。16時前Ｃ２着。（立木）

（クレバス内の吉見からの手紙　3/16　14時）

三浦は腰・背中・膝など体中を打って立ち上がるのがやっとだが、出血あざはそんなに心配することはないと思う。今のところ自力で登るのは到底不可能だし、吉見も技術的に相当難しいので、引張あげてもらうしかない。昨晩はツェルト一枚で本当に寒くて死にそうだった。今晩はシュラフがあるのでだいぶ違うだろう。

3/17（日）　晴　気温測らず

6:50、６人（田村・小森・立木・ダワさん・ポーター２人）でＣ２を出発。今日は、できるだけ早く２人を引き上げ、三浦の状態を見てＢＣへ降ろすかどうか決めるため早い出発となる。ペースは早く9:30現場到着。ザイルは２本使い１本をFix にしてプルージック用とし、もう１本で引き上げることにする。引き上げ作業は順調に進み、三浦・三浦のザック・吉見・吉見のザックの順で上げられ10:30 頃終了。三浦は腰がかなり痛そうだし吉見の疲労も激しいので、三浦をシュラフに入れツェルトで包んでザイルを巻いて、とりあえずＣ２までおろすことにする。11:30 発。少々の段差でも三浦は悲痛な叫びを発し苦しそうだ。

14:00 Ｃ２着。協議の結果、三浦の自力下山は無理と判断しヘリでカトマンズまで運ぶことにする。ダワさんによるとヘリはメラ・ラに来れるそうだ。そこで、ダワさんはヘリに連絡を取るよう明日から快速でルクラに向かい、三浦は付き添う田村と共に２人でＣ２待機、吉見・小森・立木は明日より下山となった。またヘリを待つ間Ｃ２では水・食糧など不足するため、今日中に立木・小森が一旦ＢＣに下り、明日ディカルカから水・食糧を持ってＢＣに上がるポーターと再度Ｃ２に上がることになった。

16:30 立木・小森Ｃ２発。18:10 ＢＣ着。ＢＣのテントは下の雪が解けてびしょびしょで中のものが濡れている。（立木）

3/18（月）　6時快晴　12時晴　18時晴４℃

７時にポーターＢＣに到着。どうやら水は４㎞ちょっとらしい。足りないと思ったが、氷河の末端から水が流れていたので、田村に往復してもらえば解決するということで納得。7:30ＢＣ発。ポーターのこれる限界の氷河末端に9:10着。ここから２人でＣ２に向かい10:30 着。三浦は昨日より元気そうだ。ひといき入れ吉見を加え３人で11:00 発。

12:30 ＢＣ着。ポーターの２人とキッチンボーイのニマさんが岩の上で寝ていた。13:10 ＢＣ発。13:50 ディカルカ着。ここで久々のラーラヌー

ドルを食しキャラバンに戻った実感がわく。14:30 ディカルカ発。
16:00 ターナ着。ターナには別の日本人隊がきていてダワさんから事故のことを聞いたらしく心配していた。どうも我々は割と楽観視しているようだ。ターナの３人は明日チェトル・ワラまで行きたがっているが、行けるかどうかわからない。

3/19（火）　6時快晴　12時晴　18時ガス４℃
5:30ニマさんの「ティー」の声で起きるが朝食の6:50までまた寝る。8時出発。10:00 コテの手前で昼食、11:00 発。12:00 コテ、13:30 タシンディングマを通過。ここから登りとなりヒンクーコーラから離れる。
14:30 沢沿いの大岩のところでニマさんが今日はここまでと言う。確かにこの時刻からチェトル・ワラに向かうには少々だるい。明日は峠を越えチュタンガまで行くとニマさんは言うが、吉見・小森はチュタンガまで行くなら明日中にルクラに帰ることを望んでいるようだ。（立木）

3/20（水）　6時快晴　12時晴　18時快晴４℃
7:00出発。ペースは早く8:20ペリプクラ着。ここからトラバース気味にチェトル・ワラに向かうが、行きと比べ雪が少なくとても歩きやすい。10:00 チェトル・ワラ通過、11:00 ザトル・ワラ峠着。簡単に昼食をとって11:20 発。12:00 チェトル・ラ着。ヤッケを着ていると暑く感じる。日差しも強い。
12:45 カルカ着。14:30 チュタンガ着。シェルパの地酒とジャガイモが登場したためルクラに帰るのは明日にする。夕食は、ニマさんが食糧があまりないと言うので、我々の余った食糧を総動員させ小森念願のフライドライスをつくる。更にポーター，ニマさんにマッシュポテトといりたまごをつくった。ニマさん達、初めはその不気味な形相から箸をつけるのをためらったが、そのうち結構食べていたようだ。（立木）

3/21（木）　晴
8:00発。ルクラの付近は朝からでも陽があたると暑いくらいだ。9:15ルクラ着。ダワさんは、問題のヘリは明日飛ぶ予定で、ヘリのお金のことで今日中に１人コスモ・トレックへ行ったほうがよいと言うので、昼頃の飛行機で立木が行くことになる。しかしダワさんの人力で飛行機の席の確保はどうにでもなるようで、結局３人ともカトマンズへ。
12:30 カトマンズ着。コスモ・トレックで説明を受ける。昨日、一昨日はヘリの予定がいっぱいで飛べず、また5000m へのフライトをパイロットが渋ったそうだが、とにかく明日６時カトマンズ発で飛ぶこととなった。しかし540Cに着陸できるか、田村も乗せられるか、46万円と言われるヘリ代に保険は降りるのかなど問題は多い。（立木）

3/22（金）
昨日の手はずどうり６時に吉見・小森が空港に行くがヘリは飛ばず。ヘリは小さく5000m 以上は本当に不可能らしい。そこで明日吉見を乗せ、パイロットが行ったことのあるディカルカまで飛ぶことになった。またＣ２へ向かう吉見は大変だが、ヘリを待つ２人はもっと大変か。
Ｃ２からディカルカまで三浦を降ろし26日に再度ヘリで帰ってくる予定なので、23日～26日の食糧を買いEPIボンベも２つ買う。
夕方コスモから電話があり明日はヘリが飛べないそうだ。が～～ん。（立木）

3/23（土）
明日は５時発で飛ぶそうだ。しかしパイロットの他にアシスタントが１人つくため吉見・ダワさんは帰りルクラまで歩きになるかもしれない。吉見は「はあああ」と深いため息をついているが、しょうがないと言っている。夕方、雷雨になる。（立木）

3/24（日）
雷鳴とどろき時折雨も降る中、朝５時にコスモ・トレックへいく。ヘリが飛ぶか怪しげな天候だ。30分後吉見はカトマンズ空港へ向かう。
８時前吉見が宿に戻ってくる。ヘリは飛ばなかった。ルクラは雪が降ってるらしい。今日で８日間何の連絡もなしにＣ２で２人は待っているのか、それを考えると不安である。我々は帰ってきてしまってよかったのだろうか。その辺の責任を取る形で再び旅立とうとしている吉見は、なんともいえない心境だと思う。
留守本部と連絡が取れる。田村・三浦が28日頃カトマンズに降りてくることだけでヘリの話はしていない。（立木）

3/25（月）
朝はガスっていたが、９時前には快晴になる。吉見は帰ってこない。ヘリは飛んだようだ。
10時頃立木・小森はコスモＴに行く。ジョシさんの話によると、ヘリは8:45に飛んだが雪のためターナぐらいまでしか行けないかもしれないとのこと。11時過ぎにヘリが帰ってくるそうなので、またくることにして、イミグレーション・オフィスでビザの延長をおこなう。
午後、再度コスモＴに行く。ヘリは隊員の誰かを乗せて帰ってきているようだ。ここへ来ると大津さんが言うので暫く待つ。すると田村・三浦はじめ今朝憂鬱な顔で出ていった吉見もあらわれた。Ｃ２の田村・三浦のもとにダワさんが行き、２人はターナに降りていたようだ。２人とも元気で、なかなかラッキーな展開となった。
とりあえず三浦の背骨は折れたらしいが、自然治癒しつつあるようで彼は元気いっぱいだ。（立木）

3/26（火）
15時にダワさんが来て、いよいよコスモＴなどでの清算にはいる。未支払い分はコスモＴに1645$ とダワさんへ12,330ﾙﾋﾟｰ ＋100$（除、ヘリ代）だそうだ　所持金の少ない４人で770$を吉見に渡し、あとは吉見頼みである。三浦・小森は破産寸前。
（立木）

3/27（水）
吉見はコスモＴで清算を行う。銀行でT/C の両替ができずヤミで替えたようだ。夕食は「古都」で打ち上げ。長かった登山もやっと終わった。
明日田村はバンコクへ、あさって吉見はポカラへ、デリー→バンコクをキャンセルしなかった立木・小森はインドへ向かい、日本からの送金を待つ一文なしの三浦はカトマンズに残る。今日で解散だ。
（立木）

行動記録（田村、三浦）

3/18　（Ｃ２）10時30分頃ＢＣにいた立木、小森が食料、燃料、水を荷上げし、Ｃ２にいた吉見と供に下る。荷上げされたものはＥＰＩガス大約半分、水１ℓ、お茶、食糧。ヘリは20日か21日に来るとのこと。

3/19　（Ｃ２）

3/20　（Ｃ２）うまく行けば、ヘリが来る日だが来ず。13時ごろテントの外で「ハロー」と声がする。話を聞くと、コスモトレックの日本人パーティーで20代後半から40歳くらいの５人組。帰りに燃料と食糧の余りをもらえるようだ。

3/21　（Ｃ２）快晴で風もほとんどないがヘリは来ず。ＥＰＩ燃料残りわずか。三浦自力で何とか歩けるようになる。

3/22　（Ｃ２）朝から雲が多い。風はない。8時30分頃うえにいた日本人のパーティーが下って行く。彼らにＥＰＩガス小とスモークチキン、かすてら、マカデミアンナッツなど多くの行動食をもらう。

3/23　（Ｃ２→ディ・カルカ）昨晩から強い風が吹き続けている。ヘリはまず来ないであろう。テントのポールが風できしむ。救助がいつ来るかわからずに精神的にきつい。14時頃メラ・ラ方面に人影がみえる。シェルパのダワさんとポーター２人が救助に来る。驚いたことに、彼らはルクラから24時間ぶっ続けで歩いてここまで来たそうだ。高度が高過ぎてヘリはＣ２まで来れないそうなので、今日中に下の岩小屋まで下るという。14時30分頃Ｃ２発。三浦はシェルパに支えられて何とか下ることができた。18時ディ・カルカ着。明日ヘリがターナまで来るそうだ。

3/24　（ディ・カルカ→ターナ）昨晩雪と風とカミナリで、朝起きると身体に雪が積もっていた。一晩で雪が30～40㎝降り、ダワさんも今まで５年間シェルパをやっていて、こんな天気は初めてだと言っていた。雪の中8時30分頃発。10時30分頃ターナ着。小屋の中にツェルトを張る。ちなみに三浦20歳の誕生日。

3/25　（ターナ→ルクラ→カトマンズ）5時起床、6時にはパッキングを終える。7時、8時、9時、10時とまた時が過ぎて行く。不安が頭をよぎるが、10時30分頃ヘリコプターの音が聞こえとうとうヘリが現れる。ヘリには吉見が乗っていた。ヘリはルクラで一度燃料を補給してカトマンズへ到着した。三浦は病院にいった結果軽度の腰椎圧迫骨折であった。

（三浦）

渉外・会計報告

吉見　敦司

1 資金について

1989年の資料をもとに予算の見積りをした結果、個人負担金25万円となった。学生にとって25万円というのは大金であり、後援や協賛を得ることも検討したが、時間的余裕がなく基本的に個人で担うことにした。部費から医療・装備の補助金として３万円の援助を受けた。又、90年トムール峰遠征隊長の西堀氏の夫人から３万円のご寄付を頂いた。感謝しています。

2 航空券の手配について

なるべく安く済ませるためには日本からはバンコクまで買って、その先はバンコクの代理店で買い足す方法が一番であるので、時間だけはある学生のこと、今回はその方法を取ったのだがこれが思いっきり裏目に出た。バンコク―カトマンズのチケットはどこを回っても一週間先まで予約がいっぱいといわれ、結局インド経由のチケットを買わざるを得なかった。そのためのインドビザの取得など雑務が増え、カトマンズ入りは予定よりだいぶ遅れた。バンコク－デリーは往復チケットだったので帰路をインド経由で帰らねばならず隊員は苦労していた。

日本で全て手配しても１万円位高いだけなので、よけいな時間とパワーを使うよりは往路だけでも日本で買ったほうがいいかもしれない。

ただ個人的にはバンコク、デリーは非常に楽しかったが。

3 保険について

保険会社を５、６社回ってみたが山岳保険は目ん玉が飛び出るほど高い。その中で東京海上だけは非常に安く、海外旅行に山岳割増で２ヵ月16000 円ほど（死亡1000万、疾患200 万）であった。三浦の事故でヘリコプターを使ったが、その費用も救援費用をかけておいたので全額支払われた。この東京海上の保険は使えます。

4 情報の収集

出発までの経過の稿で述べたようにトレッキング・ピークに関する情報は部にかなりあったのでそれを参考にした。メラ・ピークに関する情報は山岳年鑑をもとに資料を集めた。中でも西遊旅行が発行しているメラ・ピークの報告書がおおいに役立った。

5 現地での渉外

登山許可の取得、ガ　ド、ポーターの雇用、ルクラフライトの予約などはカトマンズのトレッキング・エージェントであるコスモ・トレックにすべて代行してもらった。出発前に、何月何日にカトマンズに着くのでガイドの確保などをお願いします、という内容の手紙をコスモ宛にだしておいた。コスモには大津さんという日本人の方がいるし、日本語が話せるネパール人もいるので交渉はスムーズに行われた。装備・食糧の調達はガイドのダワさんにお願いした。彼は日本語がとても上手で、とってもいい人だ。

トレッキング・エージェントを通さないで全てを自力で準備することも可能で、エージェントを通さない分安上がりになるが、今回は事故でヘリコプターを使用し、その際ヘリを飛ばすためには多額の前金が必要であった。コスモ・トレックにはその前金をお借りしたり、ネパール軍との交渉を代行してもらったりとずいぶんお世話になった。万が一の時を考えてやはりエージェントを通した方がいいように思う。

6 会計

◎支出

現地支出		国内支出	
・装備費	45,000円	・渡航費	
・食糧費	33,000円	成田～バンコク	330,000円
・人件費	122,000円	・食糧費	不明
・登山料	46,800円	・医療費	20,986円
・ルクラフライト	92,300円	・保険費	90,000円
・エージェント使用料	45,550円	計	440,986円
・ガイド装備費	8,060円		
・ガイド保険料	2,340円		
・渡航費			
バンコク～デリー	232,500円		
デリー～カトマンズ（片道）	91,425円		
計	718,975円		

国内・国外支出合計　1,159,961円
（１人あたり　232,000 円）

◎収入

・探検部部費	30,000円	
・寄付金	30,000円	
計	60,000円	残りは個人負担

装備

三浦　研

共同装備

	品名	総数	備考
登攀用具	ロープ 7mm×50m	2本	現地借入
	ザイル 8mm×50m	1本	現地借入(予備用)
	ロープシュリンゲ 4mm×20m	1本	
	シュリンゲ	5本	
	カラビナ	10枚	
	安全環付きカラビナ	5枚	
	アイスハーケン	5本	
	スノーバー	5本	
	アイスバイル	2本	
	赤布	5m	現地購入
	標識用竿	20本	現地入手

	品名	総数	備考
幕営用具	BC用テント 2~3人用	1	現地借入
	キャラバン用テント 6人用	1	現地借入
	テント エスパース 4人用	1	
	エスパース 2~3人用	1	
	ツェルト	2	
	ペグ	20	
	木ペグ	20	
	張り綱	10m	
	テントマット小	1	日本に忘れた
	テントマット大	1	
	スノースコップ	2	
	ポール予備(4天用)	1	
	たわし	2	
	リペアセット	1	

	品名	総数	備考
炊事用具	コッヘル(大中小セット)	1	
	やかん	1	
	おたま・しゃもじ	各1	
	かんきり	1	
	EPIヘッド	2	
	EPIボンベ小	4	現地購入
	ボンベ大	2	現地購入
	ライター	5	カトマンズの空港で没収

	品名	総数	備考
その他	軍手	2	
	ポリ袋 大	20	
	〃 小	100	
	ロールペーパー	15	現地購入
	布ガムテープ	2	
	ノート・筆記具	1	記録用
	高度計	1	
	温度計	2	
	工具(ラジオペンチ・針金等)	1	
	ロウソク中	10	
	双眼鏡	1	
	新聞紙	適宜	

個人装備

品名	数量	品名	数量
登山靴・プラスチックブーツ	1	ダブルヤッケ	1
アタックザック	1	セーター	1
ウール下着(上下)	1	毛手袋	2
オーバーミトン	1	ロングソックス	2
スパッツ	2	ショートソックス	2
ゴーグル	1	日出帽	1
替えひも	2	オーロンTシャツ	2
スパッツ用替えゴム	2	アイゼン	1

ピッケル	1	ハーネス	1
ヘッドランプ	1	カラビナ	1
予備電球	1	サブザック	1
予備電池(アルカリ)	20	個人用コッヘル	1
ナイフ	1	フォーク・スプーン	各1
コンパス	1	ホイッスル	1
ポリタン2ℓ	1	ライター	2
羽毛シュラフ(現地借入)	1	シュラフカバー	1
テントマット	1	新聞紙	適宜
缶メタ(空港にて没収)	1	ビニール袋(大小)	適宜
フィールドノート	1	筆記用具	1
パスポート	1	航空券	各自
キャラバン用シューズ	1	持病薬	1
タオル	2	時計	1
洗面用具	1	着替え	各自
現金	各自	行動食	各自

装備については、若干日本に置き忘れがあったもののその他は大体うまく行ったと思う。しかし、使用しなかったものもいくつかあるので挙げておく。

共同　[アイスバイル、アイスハーケン、スノースコップ、木ペグ]

また、我々はＥＰＩボンベを持ち出そうとしたが、湾岸戦争中ということもあり、チェックが異常に厳しく成田ですべて没収されてしまった。缶メタも同様である。しかし、成田さえパスすればその他の空港はあまり厳しくないようであった。カトマンズからルクラへのフライトではライターの機内持ち込みが禁止なので、たばこを吸う人はあらかじめザックのなかに隠しておいた方がよいだろう。我々はそのためにライターが足りずに非常に困った。

現地で購入したり借りたりしたものについては以下のようである。

共同 [ＥＰＩボンベ(購)ロールペーパー(購)ＢＣ用テント(借)ザイル3(借)
　　標識用赤布(購)キャラバン用テント(借)キャラバン用荷物袋2(借)]

個人 [羽毛シュラフ(借)ダウンジャケット(借)]

ＥＰＩボンベについては、ルクラでは売っていなかったのでシェルパにルクラからナムチェまで買いに行ってもらった。値段は日本の４倍程度である。ザイルについてはアンザイレンにしか使用しないので現地で借りたのだが、なかなか古いザイルばかりで癖がついていたりして使いずらくできれば日本からもっていくほうが良いだろう。ＢＣ用テントやシュラフ、ロールペーパーなどはかさばるので現地で借りると便利である。

食糧報告

小森　啓志

《計画・準備》

▷キャラバン中は全食キッチンボーイに任せ、ＢＣ以上の食料を隊で用意することとし５日10食分に予備食５日分を加えた10日20食分の食料を準備した。また、昼食は行動食とした。

▷食料の調達は出来るだけ安くするという方針により1990年夏の天山山脈トムール峰登山隊の余った食料を使わせてもらった。

▷メニューについては、重量・体積・コストを考えるとあまり多く出来そうにないので、基本的に米飯・味噌汁・ふりかけとし、体調や食欲によってカレー，シチュー，ちらし寿司等に変化させることにした。

▷米は高所でも上手く炊け、時間・燃料の節約にもなることから、高額のアルファー米を使用した。

《実際の食料》

●キャラバン中

キャラバン中の食事は凡てキッチンボーイに任せていたわけであるが、チャパティーや現地の米，味付け等が口に合わなかったり、高山病や下痢で体調を崩したときには、どうしても日本食が食べたくなったものである。実際に隊員の強い要望により、キャラバン中雑煮を作って食べたわけであるが、食べ慣れない食事を続けることは、精神的にかなりきついものであった。実際には難しいかもしれないが、現地食を日本風に味付けするとか、２日または最低３日に一度は日本的な食事をとるよう考えてみても良かったように思う。

●ＢＣ以上

計画が杜撰だったこともあり、ＢＣ以上の食事は貧弱なものであった。計画時には応用のきくフリーズ・ドライを利用してオムレツやフライドライスを作る予定でいたが、キャンプでは疲れていたり、油をなくしてしまっ

たり、そして何より面倒だったために結局メニューは簡単なものとなってしまった。ＢＣでこそうまいといっていた隊員が、C_1 C_2 へ上がるにつれマンネリ化した食事に不満をつのらせたことに食料係として反省している。

●行動食・非常食について

行動食は天山トムール峰登山隊の余りを適当に分配し足りないものを個人で購入するという形をとったが、キャラバン中の食事が少なかったり口に合わなかったりで行動食はキャラバン中から不足していた。非常食として分配していたカロリーメイトが行動食として消えた隊員もいたようである。そうした中クレバス転落の事故がおこり、クレバス内でビバークする２人に充分な食料を供給出来なかったことは、大いに反省するところである。

アタックまでに10日を越える日程を考えると、行動食は量と質のバランスのとれたメニューを作るべきであり、非常食についてはある程度非常事態を考えたうえでカロリーの高いものを量に注意して分配すべきであった。

《反省》

どうしても食べたいのにフルーツ缶がなかったり、餅焼き用の網を忘れたりと、食料に関する不手際が多かったように思う。本来ならば短期山行とはいえ、栄養にも充分に留意し、高山病・下痢等の病気にも対応出来る特別食を考えるくらいのことはすべきであったが、深く考えないいまま、10日分の食料をそろえることだけで、終わってしまった。

山，登頂を除けば１番の楽しみである食事を、あまりにも疎かにしてしまったようにおもう。

食糧表

品目	総量	備考	品目	総量	備考
アルファー米	60袋	1袋1.8合	ふりかけ	40	
カレールー	1		味付けのり	100	
シチュールー	1		梅干し	1パック	
ちらし寿司の素	3		鰹節	20	
もち	50		日本茶	10	ティーバッグ
卵	6袋	フリーズ・ドライ	紅茶	20	ティーバッグ
ミックス	5袋	フリーズ・ドライ	お茶漬けのり	5	
ベジタブル			Ｃ－ＭＡＸ	20	粉末飲料
キャベツ	1袋	フリーズ・ドライ	ゼリーの素	2	
じゃがいも	1袋	フリーズ・ドライ	さとう	1000g	
油あげ	1袋		しお	100g	
即席味噌汁	20		こしょう	1瓶	
カップスープ	20		油	500ml	
鮭缶	3		しょうゆ	5袋	フリーズ・ドライ
マッシュポテト	3		ほんだし	1箱	
ポップコーン	1		マヨネーズ	500g	
納豆	2袋	フリーズ・ドライ			
カロリーメイト	20	非常食			

医　療

立木　大造

1　医療表

○個人装備○

◇抗生物質（ミノマイシン）……6
◇抗生物質軟膏（テラマイシン）……1
◇下痢止め（ワカマツ・大正止瀉薬）……どちらかを１瓶
◇胃腸薬（太田胃酸）……適当
◇鎮痛解熱剤（バファリン）……適当
◇総合感冒薬（カッコントウ・ネパールの風邪薬）……適当

●共同装備●

◆せき止め（錠剤）……２瓶
◆便秘薬……１瓶
◆浣腸……2
◆座薬……2
◆日焼け止めクリーム……1
◆利尿剤（ダイアモックス）……３０錠
◆消毒薬（イソジン）……1
◆ネオスポリン点眼薬……1
◆湿布……適当
◆脱脂綿……適当
◆ガーゼ……適当
◆弾性包帯……2
◆バンドエイドナ・小……適当
◆絆創膏……1
◆三角布……2
◆テーピング……2
◆とげ抜き……1
◆体温計……1

医療品購入代（国内）20,986円　　（国外）54ネパールルピー

2　使用状況

○抗生物質（ミノマイシン）

三浦・立木を中心に服用されたが、環境や食生活の変化または高山病に伴う下痢では飲んでも効果はない。細菌性の下痢など実際必要だと思われる場面はなかったようだ。

○下痢止め

「まったく効かなかった」とは下痢で苦しみ続けた立木氏の言であるが、全体を見てもさほど効果があったようには思えない。しかし立木・三浦は熱狂的に事ある毎に飲んでいた。

○胃腸薬（太田胃酸）

「胃がすっとする」と田村・三浦・立木の支持のもと、所詮気休めと知りながらよく飲まれた。胃がもたれて下痢につながるケースが多く、下痢止めとの併用も見られた。

○総合感冒薬

カトマンズで田村が風邪をひき、間違えて買った漢方薬を投与したが効き目は薄く、座薬に頼らざるを得なかった。その時インド製の風邪薬を購入したが不気味がられ、使われることは殆どなく今も部室に眠っている。

○利尿剤（ダイアモックス）

たまに服用していた三浦はクレバスに落ちるまではＢＣから先好調であった。立木も何回か服用し調子はよかった。ネパールでは１錠１ルピー（約５円）で売られている。買っておいて損はない。

3　高山病について

今回の登山ではキャラバン中に4500㍍の峠を越えるということで、それが高山病の一つのヤマとみられていた。また１回越えてしまえばある程度の順応は得られるだろうともよんでいた。そこでここでは実際の各隊員の様子をまとめてみる。

3/6　3300㍍　皆、元気だがルクラからの下痢をひきずっている立木は苦しそう。立木以外の４人は3500㍍まで高度をかせぐ。

3/7　4000㍍　５人で4200㍍まで高度をかせぐ。夜、三浦が体調をくずし嘔吐と下痢をくり返す。高山病？　食あたり？

3/8　4500㍍　峠越え。小森は激しい頭痛と吐き気に襲われ確実に高山病。三浦は昨夜ほどではないが食欲がない。

3/9　3500㍍　トラバースの時は小森は相変わらずであったが、下るにつれ元気になる。夜は皆快調。

3/10　4350㍍　吉見・田村が苦しそうで他の人に遅れる。しかし特に目立つ症状ではない。

3/11　4800㍍　吉見は食欲がなく体もだるくターナに残る。田村はやや不調。残る３人は好調。

3/12　4800㍍　立木の下痢が悪化、３人で荷揚げを行うが田村も調子悪く途中嘔吐。吉見ＢＣ入り。

3/13　5300㍍　特に調子の悪い者はいない。三浦絶好調。

3/14　5350㍍　高度差がほとんどなく、この辺での高度順化にはちょうどよかった。

3/15　6654㍍　田村が吐き気を訴えるものの、５人で登頂。

3/16~3/17　事故のため動きまくったが、高山病の様子は誰もまったくなかったようだ。

3/18~3/21　小森は下るにつれ顔がむくみ、そのむくみはルクラでピークに達した。

4　まとめと反省

みんな、登れなくなるような高山病にはならず、ある程度の体調を維持できてよかった。前回のアイランド・ピークから想定するともっとひどい状況になると思ったが、やはりキャラバン中に4500㍍の峠を越えたのが高度順化につながったようだ。そのためか思ったほどの利尿剤の需要もなく、その効果を顕著に示すことはできなかった。それよりか平地での体調の維持が、登山に入るまで長かったせいか、大変であった。わかりきったことではあるが、行きにインドなどに寄るべきではない。

よって薬も平地のほうが多く活躍した。しかし田村がカトマンズで風邪をひいたとき、総合感冒薬はなく代わりに総合漢方薬があり、あまり意味がなかった。買い間違え、田村氏には申しわけなく思います。このときはついでに持っていた座薬が効果てきめんで、寒いところ（暑いと溶ける）ではおおいに使えると思う。（なかなかの屈辱かもしれないが）

水が違うところで暴飲暴食をすると必ずといっていいほど腹がブロークンになる。胃がものを消化できなくなるのだ。このような状態で太田胃酸を飲んでもあまり効かない。日本なら少しは効くのだろうけど。

山では高山病にさえ注意すれば良いと思っていたが、三浦氏のクレバス30㍍転落事件では医療係としてなにもできなかった。当然起こりうることで、事前に骨折に関する知識でも頭に入れておくべきだったと思う。それと日焼けについての認識も甘く、顔はボロボロ、唇は２倍になってしまった。しかもそれらは持って来るべきであった「登山の医学」に記されていることで、忘れたのが悔やまれる。

薬を愛する人とそうでない人がはっきり分かれた。しかし薬の方は気分屋さんでなかなか愛する人の期待に応えてくれない。「でも君が好きなのさ」（三浦・立木談）

反省・感想

吉見　敦司

今回はリーダーと渉外・会計を担当したが、個人的理由で後発隊に回ってしまって、バンコクでのチケットの手配などを先発隊に任せてしまい、納得いかない部分があったので先発隊としていくべきであった。

ネパールに遠征経験のあるう田村氏がいっしょだったこともあって現地での交渉もスムーズに運ぶことができた。ただスムーズすぎて面白くないという面もなきにしもあらずであった。

予定通りにキャラバンが進まずひとりでいらいらしていた。リーダー意識で先に先にという思いが強すぎて気負いすぎであったかもしれない。

全体を通して非常に楽しくおもしろい遠征であった。何しろメンバー全員登頂できたのである。三浦の事故があったので一概に大成功とはいえないが、５名登頂できたことは評価されてもいいと思う。

頂上に立った時は自分が登頂したことよりも、みんな一緒に登れたことの喜びで思わず涙がでたものである。またネパールだけでなく、タイ・インドを旅し自分に「アジア」に目を向けさせてくれるいい機会にもなった。

人生最長の日

三浦　研

1991年３月15日15時45分、6.654㍍の山頂に立っていた。４人の仲間と共に。山頂の直前では涙があふれでてきた。なぜか無性に涙があふれてきた。

15日頂上アタックの日、5500㍍のＣ２から1100㍍の高度差、はっきりいって絶対に登頂は無理だとおもっていた。歩いても歩いても少しも近づかない山頂。果てしなく遠くおもえた山頂。その山頂に自分が立ったときには、もう登らなくてもいい、つらくても頑張ってよかった、長かったメラピークまでの道程などの想いが頭の中をかけめぐって、涙があふれてきた。アタックの途中、誰かが「ここで引き返そう」といいだすのを待っていた。そんなつらさを乗り越えて山頂に立ったときは、やはり、言葉ではいいあらわせない感動があった。

そんな感動もつかのま、下山では天国から地獄へたたき落とされるようなできごとがおこった。周囲も暗くなりかけＣ２へと帰路を急ぐ途中のことだ。不注意にもパックリと口をあけているクレバスに足を踏み込んでしまったのである。トップを歩いていて目の前に幅40㍍ほどのクレバスがあり、回り込もうにも横に長いクレバスでどこまでも続いている。「このくらいのクレバスなら軽く飛び越えられるだろう」「もし落ちても腰で止まるだろう」とおもい、ジャンプしようして足を踏ん張ったとたんに足の下の雪が崩れて、あっと言う間もなく体が宙に浮いていた。今まで空から落ちる夢を何度も見たが、まさにその夢のように果てしなく落ちて行く。体が加速していくのがわかった。しかし、運よく奈落の底まではいかず、30㍍くらい落ちたところの氷の棚の上にとまっていた。落ちた瞬間は体がグキッとねじれるような音がした。「ああ、こんなに簡単に死んでしまうのか。このまま死ぬんだな。」と思った。しかし、立つことはできないが、声も出るし外傷はなくなんとか生きていた。

そこで、まずザックをおろし、体と腕に巻き付いていたザイルを、ポケットにはいっていたナイフで切った。そして、上に自分が生きているというこ

とライトでしらせようとして、ザックのうわぶたに入っているヘッドランプをとりだそうとすると落ちたときの衝撃で砕け散っている。仕方ないのでありったけの大声で叫んだ。動こうとしても体中に激痛がはしり思うように動けない、立ち上がることすらできない。そして、上を見上げると落ちたところから下が広がっていてオーバーハングのようになっていて自力で登ることは不可能に思えた。なんとか少し平なところまではいあがり、このままでは死んでしまうんじゃないかと思い、だれか降りて来てくれとただひたすらに叫んだ。すると、吉見の「いま、降りていくからなー。」という天使のような声。本当にうれしかった。そして、神のたすけともいえる吉見の登場。いつ崩れるかもわからないクレバスの中に降りてくるということは本当に勇気がいることだろう。吉見に体を見てもらうと外傷、出血はないという。運のよさにつくづく感謝する。そして、その日はツェルトを張ってクレバスの中でビバーク。身体中が痛い。そして寒い。吉見は俺にセーターをかしたのでもっと寒そうだった、隣でがたがた震えていた。

そして夜明け。ＥＰＩと行動食、シュラフが届けられた。しかし、ライターがつかない。相変わらず寒く、身体や頭は痛かったが、吉見が降りて来てくれたおかげで何とか生きながらえることができた。吉見は俺の命の恩人だ。

また夜が明けた。そしてその日、クレバスに落ちて39時間後に、再び太陽を見ることができたのである。田村さん、小森、立木、ダワさん、ポーターによりクレバスから引っ張りあげられたのだ。

空は快晴で、遥彼方にエベレストが見えていた。

小森　啓志

何かある、登山のほかにもなにかある筈だ。まさか山に登っておりてきて、はい、おしまい、そんなものじゃあないだろう。今まで自分の知らなかった刑而上の何か、そんなものがあるのじゃないかという、ぼんやりした想いに期待をよせて登山の決意をした。いつしか自分はネパールの山奥に。果たして、そんな何かを見つけることはできたのか。

山登りはきつかった。特にあの憎き高山病、絶対かからぬと豪語していたが、ザトル・ワラでついにかかってしまった。正直言って死ぬかと思った。地獄を見たとさえ思った。肉体がやられると精神もやられる。食事もとれずテントの中、シュラフにちいさくうずくまって考えたことは、

“なぜ、こんなところまで来たのだろう？
精神鍛練？　　まさか
山の魅力にとりつかれて？　　ちがう
登山以外の何か、そんなものを得るために？　　うそだ
結局はヒマラヤ6000㍍の山に登りましたの金バッヂがほしくてやって来たのじゃあないのか。何という不純な、薄汚い、ああ帰りたい帰りたい。”

それでも少し具合がよくなると、やっぱり金バッヂがあきらめきれず、少しずつ少しずつ山頂に向かって進んでいた。

自然は凄かった。まさに大自然という感じで圧倒された。

そびえたつ無名峰　　すごい
大氷河の芸術　　すごい
山頂まで一面の大雪原　すごい

しかし、何か物足りない。迫力に圧倒され感激はあるのだが、心にひびく感動がない。こんな写真、いやもっと奇麗な写真、どこかで見たなあ、などと浮気なことを考えていた。エベレストを見た時にも、日本一のフジ

ヤマがあれだけ秀麗なのだから世界一となるとさぞかし素晴らしいのだろうという、自分の無知で勝手な想像に反し、高さこそあるものの、黒き岩壁がむき出しになった普通の山に思え、少し残念に思ったものである。

しかし、それでも、やっぱり、山頂間近、そうして立った山頂は感無量。ばんざいばんざい、握手握手としているうちに、背中から熱いものが上がってきて、目の前の山々がぼっとかすんだ。ふるえる程の感動とはこうゆうものだったかと実感した。

この感動はこれでよい。努力がむくわれた時の喜び、嬉しさ、これがなくなったら終わりである。悲しきことは、そこに厳然としてあるものをそのまま受け入れて感動できないことである。

登山を終えてみて、果たして何があったか。

そこには、知らず知らずのうち、世間に迎合するようになっているスレた自分、無機的な都会の生活ですっかり感受性の弱くなった自分がいた。無理に変えなくてよいから、開き直って、自分にとってホントウのコト、主観的事実を大切にしよう、なんてことを想ったものである。

随分、否定的でしみったれたことばかり書いしまったが、結果的にはたいへんいい経験となり、登山歴一年にも満たない自分にも声をかけてくれた、吉見さん、田村さんに感謝している。そしてあのメラ・ピーク登頂は今までの人生の中で最高の感動であると今でも思っている。

感想

立木　大造

５名で登頂してあっさりと下っていたら語られることも少なくなっていたと思うが、インドへ行ったり２名が行方不明になったりしたので、予定調和内でのアトラクションはこのくらいだなと思ったりもした。まあインドへ飛ばされた代わりと言ってはなんだが、全員の登頂があり、人生楽あれば苦ありを体感できたではないか。チャパティを中心とした炭水化物攻撃も笑い話になる。

上は登頂した際の喜び感動の裏の二次的側面の感想だ。何かフィードバックさせなければ現実が自分のものにならない。奇跡か苦労かを判断しかねる状態にあった。

登頂翌日、小森と昨日のトレースを登り返していた。やはり一つの大きな現象に奇跡などありえないが予定調和でもない。そこで初めて恐ろしいほどのリアリティを感じた。6000mが現実になった。チョモランマを見てあれが世界一の高さの山ですと、いちいち頭に結びつける必要もなくなった。さくさく登ってさくさく下っていたら夢で終わり、行ったのだけれど言葉で遊ぶだけの不感症になっていたのではないか。

登頂日より翌日、翌々日の風景のほうが鮮明によみがえる。それはよくある観光パンフレットのビーチの写真のように。

それにしてもこれほどまでに予期できない地点に立つとは思わなかった。１年前、半年前、何を考えていたのか、帰りのキャラバン中に少し前の自分を思い起こした。

インチキブラックジャックの巻

吉見　敦司

２月26日、先発隊がデリーへ飛んだ日、私は30℃を越すバンコクの街を汗をふきふき１人ぶらぶらしていた。バンコクの若者の街サイアムロードを歩いていた時、１人の男が突然話しかけてきた。何かの客引きの奴かと思ったが、よく話を聞いてみるとどうもそうではなく、日本のことが聞きたいらしい。奴の妹が今度日本に働きに行くのだと言っていた。それまでタイ人とあまり話をしていなかったので、いいチャンスだと思いダンキンドーナツに入って日本のことを話してあげた。話が盛り上がって打ち解けた頃、奴はオレの家に来てもっと詳しい話を聞かせてくれと言う。私は何の疑いも持たず、すぐ承諾しタクシーで奴の家に向かった。

すぐ近くだろうと思っていたら車はずーっとハイウェイに入った。「Ｈｏｗ　ｆａｒ？」と聞くと、「ＳｏｏｎＳｏｏｎ」と言ったがちょっと心配になって所持金を確認すると10ドルほどだった（実はバッグの底に1000ドル入っていた）ので、金を巻き上げられてもいいやと思いどっしりと座って外の風景を眺めていた。しかしいつまでたっても車はハイウェイから下りない。１時間強走ったろうか、バンコク近郊の住宅地から田園地帯に変わったころやっと奴の家だというところに車は到着した。こんなところで身ぐるみはがされたらホテルに帰れないなあ、そしたらネパールいけないなあ、とボンヤリ不安になりながら奴の家に入ると妹ではなくごつい男２人が迎えてくれた。

いつまでたっても妹なんて出てこない。仕方がないからごつい男２人と差し出されたコーラを飲みつつ話をしていた。私がこれからネパールに行くんだと話すと、若い方の男が「実はオレもカトマンズで働いているんだ。ホテルのカジノで働いている。もうすぐオレもカトマンズに帰るからカジノで大儲けしないか？イカサマを教えてやる」と言う。できすぎた話である。しかしぼくはその時それまでの不安などどこかに飛んでゆき狂喜してその話にとびついた。そのイカサマは簡単ですぐ覚えることができた。

イカサマを練習していると、男が「今から友達をよぶから本番をやろう」と言う。ちょっとならいいかと思った。思ってしまった。その友達は準備していたかのようにすぐやってきた。１分とかからなかった。そこで初めてヤバイと思った。しかしゲームは否応なしに始まってしまった。イカサマなので私が勝つ、がそのイカサマは男の友達にもはっきりとわかるのである。しかしその友達は下手な演技でくやしがる。もうやめようと言ってもきかない。私の勝ち分をできるだけ増やしておいて、最後に大負けさせて金をよこせというのが彼らの戦法だ。勝ち分はとうとう250 万円にまでなっていた。

非常に危険な状態である。私はカードを投げ出し、もうこれ以上は絶対やらないと彼らの誘いを拒否し続けると彼らはしぶしぶ引き下がった。その間にイカサマ師は姿をくらましていた。彼らが車でホテルまで送ってくれると言うので車に乗り込むと運転手のほかにごつい男が３人乗ってきた。走りだしたとたん態度が急変し「ホテルに着いたら金をよこせ」とすごんだ。しかしその男たちはバカだった。私は適当に金はないとごまかすと、簡単に承諾し私を車から降ろして去っていった。その降ろされた場所は畑のど真ん中の何もないところで、やっとのことでタクシーを見つけカオサンに戻った。ホテルについて小森の顔を見たときのうれしさはたとえようもないほどでありました。

インドでのこと

小森　啓志

インドについた。一度行ってみたいと思っていたインド、まさかこんな形で来ることになるとは。とにかく悪い気はしていなかった。

インディラ・ガンジー国際空港は夜10時をすぎているとはいえ、何とも薄暗く人気も少なくてさびれた工場の感じをうけた。この空港は市街地から実に17㎞もはなれた所にあり、この時間になるとタクシーを使って行くほかない。

我々はタクシーに乗り込んだ。なぜか前部シートには３人もの男がきつそうに座っている。１番左の男は「どこから来たか、トキョー？オーサカ？」とあやしげな日本語で話しかけてくる。適当に返事をしているうちに車は走り出した。

ここからである。

「ニューデリー駅へ行ってくれ」‥‥近くのメインバザールには安ホテルが沢山あるのである。

「ＯＨ，ニューデリー、メインバザールのホテルはもう全部closedよ。インドは夜がとても早い。我々が50ドルのホテルへつれていってやろう」

「だめだめ50ドルのホテルなんかとまれない、高すぎる。メインバザールへ行け」

「ＯＨ，メインバザール、夜はとても危ないよ。飯たべるとこもないね」

いくらたのんでも行ってくれそうもない。行け、行かないの押し問答をつづけているうちに車は何もない道ばたに止まった。

「さあどうする、50ドルのホテルに行くか」

いいかげんこちらも頭にきていた。目的地に行かないタクシーがあるものか。もういい空港へ戻ってくれ、というと敵は意外にも

「空港へ戻るなら200 ドルだ」というではないか。そんなバカな話があるものか。敵のいいぶんはこうである。我々はお前たちを客として乗せたのに空港へ戻ったらその分時間をロスしたことになる。それが200 ドルだと。しかし時間のロスはこちらだって同じなのである。そこで、こっちも時間をロスしたというと今度は、ガソリン代が200 ドルだというのである。目茶苦茶である。これだけ金払いの悪いカモも少ないのであろう。敵もしびれをきらして

「イフ　ユー　ドント　ペイ、アイ　ファイト！」

といって、にぎりこぶしをつきだしてくるのである。言葉上よくわからなかったけれど、吉見さんは胸ぐらを捕まれたりしていた。

ふと弱気になって「吉見さんどうします、払いますか？」ときいてみると「絶対払わねえよ」と普段の穏やかな声と違い気迫のこもった声。さすがタイのイカサマ・ブラックジャック邸へ１人で乗り込んだ男だ。自分も勇気を得たが、解決の糸口が見つからない。仕方ない、どこまで金額を落とすかということで、とりあえずこの車でのメインバザール行きはあきらめた。敵がうそつきならこっちもうそついて妥協するしかない。

「俺たちは、インドの物価が安いときいてたもんで、300 ルピーしかもってないのだ」

敵もついにあきらめたか、悪いカモをつかまえたものだという感じで

「それじゃ200 ルピーおいてけ。それであそこに止まってるオートリクシャーでメインバザールまでいきな」

かくして我々は何とか解放されたのであった。

想いだせば間抜けな話であるが、実際には凄くこわくて緊張したのである。我が憧れのインド、第１印象は最悪のものとなった。

前日の苦い体験のせいで我々は一刻も早くインドを脱出したかった。しかし、我々は飛行機に乗り遅れてしまったのである。違う、我々のせいではない、チケット代理店のフライト時間書き違えのせいである。おかげであのインドにもう１泊。吉見さんのあのがっかりと疲れた様子はひどかった。しかし遅れたおかげで幸か不幸かインド最大の祭りホリーを体験することになった。

さてインド最大の祭り、どんなものかと知りたく思い、でかけた。ふと裏通りはいると、わっと云うまもなく大勢の若者にかこまれた。齢のころ15~20 、インドではあまり見なかった年齢の若者達である。顔体に色水をかけられ意味不明にブレイクダンスを踊らされた。まわりで見てる大人、子供はこの変な異国人を見て大笑いしているのである。そのうちに20くらいの若者のリーダー格の青年に家に来るように誘われた。どうせ今150 ルピーしか持っていない、命さえとられなきゃいいやと思い行ってみる。割と裕福そうでテレビにビデオまでもっていた。そこでビデオを見せられたが、これがまたダンスのビデオ。これ見て踊れということらしい。さんざんみんなに笑われた後、さすがに今日はフライト逃せず帰ることにした。ホテルに帰る道でも、インドのみんなに指ささされ笑われた。果たして、ホテルに帰ってカガミをみると、カガミの中には色水ぬりたくられて真っ黒になった自分の知らない人がいた。

インドもなかなかよいものだと思った。

列車にて

立木　大造

バラナシで列車に乗った。一路デリーに向けて16時間の道程だ。乗ったはいいが動きだしたところで、検札に来た車掌は席が違うと言う。なにやら数字を書き込んだ紙をくれ、次の停車駅でこの番号の車両に移れとのことだ。インドの列車は車両と車両の間が行き来できない。

何という駅か知らんがついた。おっもいザックをしょって紙の番号目ざして長いホームをダッシュだ。くそーめんどくさい、バラナシで白人に聞いたのが間違いだった。なんとか見つけた。しかし改めて乗り込んだが中はインド人で一杯ではないか。切符に記される数字の席にもすでに定員を越えてあふれんばかりのインド人がいる。そこのワンボックスで一番えらそーなのが私の切符を取り上げて、まわりの連中と討論を始めた。私と小森はその様子をしばし眺めていたが、結論がでたようで我々はその中に座らせてもらえることになった。

列車は変わらぬ風景を進む。気合いを入れると結構速く、途中でパンクするバスに比べ頼もしい。しかし定員オーバーなわけで窮屈だ。私はこの席は当然我々のものだ、こいつらはそのうち降りるだろう、と思いながら窮屈さを忘れるため小森に借りた太宰治を読んだ。まわりのインド人は日本語の文章がめずらしいらしく、本を貸すと縦にしたり横にしたりして文字の解読を試みていた。

夕方になり車内の人口は更に増え、通路挟んで向かいにいる小森が見えない。おまけにボックス内でヒンズー語による真剣な討論会が始まった。私はできた輪のど真ん中にいるのだが、ただひたすら眺めるだけだ。政情の不安定な国だけに政治的なことでも話合っているのか、小森は相変わらず向かいのじいさんとガンの飛ばし合いをしてんかなあ、などと考えているうちにラクナウについた。21時前だ。

ラクナウをでて、今日の寝台を確定させるべく車掌が鬼のような形相で怒鳴りながらやってきた。切符のない人間を容赦なく切り捨てていく。私は自信をもって切符を車掌に見せた。さあどけおまえらと言わんばかりに。車掌が見る。反応が悪い。どうも我々が切り捨てられてしまったようだ。彼らが正しかった。さてさてどうするか、今日は寝れないのか、それでもいいがザックが邪魔だ。小森もじいさんの眼力に負けたのか撤退してきた。立ち往生していると車掌が帰ってきてまたもや紙をよこし、その車両に行けと言う。人のひしめきあう通路をザック背負って強行突破だ。ピッケルでつつかれた警官はむっとしている。

今度は暗いホームをダッシュだ。駅には１分位しか止まらない。走って走ってやっと見つけ、動き始めた列車に飛び乗ってなんとか間に合った。この車両はやけにすいていて我々の寝るところもしっかりあった。

ただの長椅子の寝台に横になって開きっぱなしの窓から外を見ると、月に照らされた草原が続いている。なんとなくその景色が気に入ってボーとみていた。あのインド人達は、本当は間違えていた我々を21時まで座らせてくれたのか、偉そーにしていたのもいたけど。とにかく悪い印象を持ってしまって悪かった。

そんなことを考えながら寝たが、時折響く「チャ〜イ」の声で何度か目がさめた。明日はバンコクだ。

……

メラ・ピーク登山隊報告書

発行日　1992年7月1日
編集責任　吉見敦司
　代理　立木大造
印刷　立木大造
　　小森啓志
発行　横浜市立大学探検部